

『クオリア』

作・演出 春田鮎

《登場人物》

榎田秀司：天才的な脳科学者 うつ病の特効薬クオリアを開発

クオリアによる殺人事件が多発し失踪中

澤リカ子：榎田脳科学研究所に勤務する科学者

榎田秀司の一番弟子 精神科医でもある

日下部太一：帝都新聞に勤務する新聞記者 澤リカ子の大学時代時の後輩

柏木峰子：厚生労働省保険衛生局課長を務めるエリート女性官僚

厚生労働大臣・新海昇の命を受け榎田秀司を捜索する

刑事：クオリア薬害裁判の担当刑事 元交通課 多忙を嫌う

容疑者1：クオリアによる殺人を犯した多重人家障害の容疑者

容疑者2：クオリアによる殺人を犯した多重人家障害の容疑者

容疑者3：クオリアによる殺人を犯した多重人家障害の容疑者

看守：容疑者が取り調べを受ける警察署の看守

検事：クオリア薬害裁判を担当する検察官

アメリカン製薬を起訴し真相の追及に奔走する

弁護士：クオリア薬害裁判の被告・アメリカン製薬を弁護する女性弁護士

元検事

裁判長：クオリア薬害裁判を担当する裁判官

赤井喜和子：カズマの姉 アメリカン製薬を訴える原告団の一人

原告団1：アメリカン製薬を訴える原告団

原告団2：アメリカン製薬を訴える原告団

原告団3：アメリカン製薬を訴える原告団

原告団4：アメリカン製薬を訴える原告団

高山：厚生労働省保険衛生局勤務 柏木峰子の部下

新海昇：厚生労働大臣

警察署長：多重人格障害の殺人犯を拘留する警察署の署長

警備員：厚生労働省の警備員

まり：うつ病患者 クオリアが原因とされる殺人事件の犯人として拘留中

榎田に治療を受けていた

カズマ：榎田と共に逃亡した少年 クオリアを服用中

ユリ：榎田を敬愛し逃亡生活を支える

フミコ：20年間、読書が続ける女性 膨大な知識と無限の記憶力を有する

ドウジ：眠り続ける男

少女：花束を届ける少女

◆プロローグ

高速道路の車の音。ビル建築の騒音。都会の喧騒と無意識下の電子音の洪水。

柏木N「数か月前、私は厚生労働大臣・新海昇に呼ばれた。それは社会問題になっていったけれど、自分がその渦中に巻き込まれるなんて想像もしていなかった。まさにその瞬間まで」

響くノックの音。厚生労働大臣執務室に呼ばれた厚生労働省保健衛生局課長・柏木峰子。

新海厚生労働大臣「入りたまえ」

柏木「失礼します。保健衛生局課長・柏木峰子です」

新海「ご苦労さん。とにかく中へ」

柏木「は。失礼します」

新海「ま、座りたまえ」

柏木「はい、失礼いたします」

新海「噂は聞いてるよ。東大卒の才女が異例のスピード昇進で、女性の課長職、最年少記録を塗り替えたって。どうですか？仕事の方は」

柏木「はい、諸先輩方の背中を追うので精一杯ですが、仕事はやりがいがあり、国家のために誠心誠意取り組んでいるつもりです」

新海「(高笑い)、建前はいいよ。私も役人の出だ。霞が関の矮小さは嫌というほど味わった口だ。しかし今日君に来てもらったのはそんな話をするためじゃない」

柏木「・・・新薬クオリア、ですか？」

新海「ん。さすが察しがいいな。手間が省けていい。それじゃあ簡単に言っておこう。新薬クオリアによる殺戮を止めるんだ。どんな手を使ってもいい。私の名前もどんどん出して構わない。ただし」

柏木「ただし、なんででしょうか」

新海「薬の開発者、榎田秀司を生きのまま確保しろ。彼は今、行方不明だ」

柏木「行方不明？確保と言われましても、我々に逮捕権はありません」

新海「逮捕しろとは言っていない。確保しろと言ったんだ」

柏木「ですが・・・」

新海「その際は自衛隊が動く。君の任務は彼を発見することだ。以上だ。わかったらよろしい、下がりましたまえ。それから、報告は直接私に。頼んだぞ」

柏木「・・・はい」

都会の喧騒の中、アスファルトにヒールの音を響かせて歩いていく柏木峰子。

柏木N「榎田秀司博士の開発した抗うつ剤の新薬“クオリア”は、発表当初、画期的な効果を発揮して、長年うつ病に悩まされてきた日本中の患者達を救った。しかし、クオリアが日本中に広く広まった頃と時期を同じくして、うつ病患者達による原因不明、動機不明の無差別殺人事件が多数勃発。始まりは週刊誌、そして次第にテレビやインターネット上でも“新薬クオリア”との関連が取り沙汰されるようになった。それに合わせるようにして、薬の開発者である榎田秀司博士が失踪。手掛かりのないまま、無為な時間だけが過ぎ去っていった。ある日、私はネット上の動画サイトで、榎田博士の大学での講義の様子を

映した動画を発見した。彼は少し足を引きずる独特な歩き方で、生徒たちにこう語りかけていた」

語り始める榎田。

榎田「人間の心とは、いったいどこに存在するのか？ 悲しみを感じた時、我々は”胸が痛む”と言い、喜びに出会えば”胸が弾む”と言う。しかしご存じのように、メスで胸を開き、悲しみや喜びの痕跡を探してみても、そこにあるのは肉の残骸としての、心臓、肺、その他の消化器、その他の臓器。それならばやはり、体の一番上、頭蓋骨に囲まれた小宇宙ともいえる脳、脳こそが我々人間自身なのだろうか」

歩き出す榎田。軽く足を引きづっている。

榎田「とはいえ、本当の宇宙の方が実態は解明されているだろう。確かに人間の思考はニューロン、すなわち神経細胞が網の目のように伸ばしていく樹状突起の無数の連結によって伝達されていくわけだが、シナプスが受け取るのは電気信号。微弱ながらも電気信号であるならば、そう、気付いているとは思いますが、数式に変換が可能なはずだ。しかし私が手にしたかったものは人間の思考などではない」

榎田「……………私に手にしたものは

……………主観的体験による質感の共有

……………クオリアイノベーション」

柏木N「不思議な男だった。強いオーラを感じるのに、目を閉じるともうすでに、彼の顔が思い出せない。話している内容は難解だったが、不思議と納得してしまう口調だった。それからしばらくして、新薬クオリアを服用していた殺人犯の事情聴取を見る機会が出来た。私はクオリアと榎田に関する、どんなに小さな情報でも欲していた。あらゆる機関に協力を要請したが、思った以上に大臣の名前は効力を発揮した」

◆第一幕 分裂

警察の取調室。隣の部屋からマジックミラー越しに、取り調べの様子を見る柏木峰子。

取調室には刑事、そして精神鑑定を依頼された澤リカ子。その前に、赤い縄で手首を拘束された多重人格障害の容疑者。

※3人↓1人の容疑者の3つの意識

※刑事と澤はあくまでも一人の容疑者に語るモードで

柏木「署長、あの女性が澤リカ子准教授？」

警察署長「はい。榎田博士の右腕としてクオリアの開発にも携わっていたそうです。今日は彼女は国選精神科医の当番医で、取り調べに同席しています」

柏木「そうですか」

署長「柏木課長、そんなに隠れる必要はありませんよ、マジックミラーは向こうからは決して見えませんから」

柏木「すみません、こういう場所には慣れていなくて」

刑事「もう一度聞く。殺人の動機は何だ？」

容疑者「……」

刑事「明日でもう6日だ。そろそろ話したらどうなんだ？むしやくしゃしたでもいい、誰かを殺してみたかったでもいい。お前と被害者とは何の接点も見つからない。私もそろそろ家に帰りたいんだ」

容疑者1「動機なんかありません」

容疑者2「ストレスも殺人願望もありませんよ」

容疑者3「私はどちらでもよかったけれど、やらないで後悔するぐらいなら、やって後悔しようかなって」

刑事「また始まった……。一体、今話をしているのは誰なんだ！？名前を言ってみろ！」

容疑者たち「私の名前は佐藤まさる、クローエンキンブル、タバサ、マチルダ、川端正剛、リリーアン、劉彩蓮」

刑事「あーもういい、やめろやめろ！」

澤「刑事さん、落ち着いて。多重人格障害の人の意識世界に引きずり込まれてはだめよ」

刑事「わかっていますけど……。精神に異常を来した者の取り調べはあまり慣れていませんので……。失礼しました。もう大丈夫です」

監視カメラがある方向を見上げた刑事。

刑事「今日の取り調べは終了する。容疑者収監」

看守に連れていかれる容疑者（たち）。

看守「歩け！」

刑事「深い溜息」

澤「気持ちはわかるわ。3年前に改正された刑法39条。心神喪失および心神耗弱状態の者においても、国の定めるところの精神医学の専門家を同席のもと取り調べを行い、通常と変わらない法の裁きを受ける。だけどいくら専門医不足だからって、自分みたいな未熟者が取り調べに同席していいのかしらって、毎回悩むわ」

刑事「まったく同感ですよ。もともと交通課の一介のお廻りだった私が、ある日突然捜査1課、殺人課に転属になったんですから。殺人事件が、多すぎるんです。捜査が間に合わないほどのこんな事態は、異常ですよ」

澤「止まらない無差別殺人事件。どうしてこんな国になってしまったのかしら」

刑事「教育がいけないんですよ。いや、やはり根源は家庭ですね。核家族化が言われて久しいですが、祖父母の死を看取る文化が希薄になったがゆえに、死に対する尊厳というか畏怖の念というか……。んー、澤先生はどう思われますか？」

澤「どうなんでしょうか……。ただ」

刑事「ただ？」

澤「こう考えてみたりはします」

刑事「……」

澤「コンピューターの発達に伴い、ご存じのようにインターネット、携帯端末、メール、ブログ、ツイッター、フェイスブックなどなど、そういったソーシャルメディアに心酔しきった人類の思考は、知らぬ間に、いつしか単純化されて記号化されて、画一的な心象風景を形成するに至った」

刑事「……ごめんなさい、ほとんど分かりません」

澤「つまり簡単に言うならば、似たような人間ばかりになったという事です」

刑事「なるほど、それは確かに言えますね」

澤「(笑) 偉そうに言いましたけど、榎田博士の受け売りです」

刑事「ああ、澤先生は榎田博士のお弟子さんでしたよね」

澤「はい」

刑事「榎田博士はどんな方なんですか？」

澤「博士は・・・とても、すばらしい方です」

署長「いかがでしたか？何かつかめましたか？」

柏木「はい、とても有意義でした」

◆第二幕 疑獄

柏木N「私は、抗うつ剤の新薬、クオリアによる無差別殺人を食い止めるためには、一日も早く榎田秀司博士を発見し、身柄を確保することが必要だと感じていた。そのために私は、榎田博士の右腕と言われる澤リカ子に近づくことにした。彼女がクオリアの真相を知っていて嘘をついているのか、それとも彼女自身も今回の騒動に翻弄されているのか、その時点ではまだどちらとも言えなかった。そして私は彼女が証人として出廷する“新薬クオリア”薬害裁判に出かけて行った」

裁判所。検察側の証人として証言する澤リカ子。

裁判長「証人は前へ」

澤「真実のみを証言することを誓います」

検事「それでは裁判長、検察側の証人尋問を始めさせていただきます」

検事「あなたのお名前は」

澤「澤リカ子です」

検事「ご職業は？」

澤「科学者です」

検事「どういった？」

澤「脳と精神医学です」

検事「あなたはどちらにお勤めですか？」

澤「榎田脳科学研究所です」

検事「そう、あなたは榎田秀司博士の一番のお弟子さん。間違いないですね？」

澤「・・・はい」

検事「あなたは榎田博士と共にある研究を続けてきた」

澤「はい」

検事「そのため、この数年ほとんどの時間を彼とご一緒に過ごしてきた？」

澤「はい」

検事「ご家族より長い時間を共に研究に費やしてきた」

澤「はい」

検事「喜びも悲しみも二人で乗り越えてきたんですね？」

澤「・・・はい」

検事「じゃああなたは榎田博士がいまどこにいるかご存知ですよね？」

弁護士「異議あり！当裁判はアメリカン製薬と薬害被害者の裁判です。証人への質問はク

オリアのみに限定させていただきます！」

検事「わかりました」

澤「あの・・・私、博士の居所は知りません。本当に・・・」

検事「いいでしょう。質問を変えます。榎田博士が2年前に開発した新薬“クオリア”。この薬はどういった病状に効果があるんですか？」

澤「主に、うつ病です」

検事「うつ病。アメリカ、そして日本でもますます患者数が増え続けている、あのうつ病ですよね？」

澤「はい」

検事「では、クオリアはうつ病に対して、どのように働きかけて治癒に向かわせるんですか？出来るだけ分かりやすく説明していただけると助かります」

澤「はい・・・。クオリアとはもともと、主観的体験が伴う質感のことで、脳科学の世界で現在一番の注目をされている分野です」

検事「ごめんなさい。すでに難しい」

澤「簡単な話です。ようするに“夕焼けが赤くて寂しいなあ”とか、“桜の花が咲くと気持ち明るくなるなあ”とか。誰もが感じている雰囲気や記憶っていうか」

検事「なるほど、だから主観的体験が伴う質感というわけなんですね」

澤「そうです。榎田博士はそのクオリアを数式化することに成功したんです」

検事「クオリアの数式化に成功した。数式化に成功するとどうなるんですか？」

澤「薬が出来ます」

検事「それが新薬クオリア」

澤「そうです。宇宙にある全ての物質は元素によって構成されています。あとは組み合わせの違いなので、設計図が判明すればあらゆるものが科学的に作る事が出来るんです」

検事「つまり博士は、気持ち、心、などと言われてきたものを、物質化したんですね？薬という形に」

澤「はい。幸せの質感を合成したものが新薬クオリアです。うつ病の患者さんが服用すると、脳内は幸福感で満たされるため、うつの症状がやわらぐんです」

検事「それは麻薬的ではありませんか？」

澤「それは私にはわかりません」

検事「ところであなたはこのところ、精神医学の専門家として、殺人事件の取り調べに同席していたと伺いましたが、どうです？あなたと博士が開発した薬によって、患者たちが殺人鬼に変貌してるんだ！その事件の取り調べをあなた自身が行っている！どんな気分です？教えてください！榎田はどこにいるんだ！？」

弁護人「異議あり！？検察はあたかも一連の事件の原因がクオリアだと決めつけています！しかも博士の行方など」

検事「しかしこの原因不明、動機不明の殺人事件が表沙汰になったと同時に、榎田博士は失踪したんですよ！博士の追及なくしてこの裁判に白黒つけられますか！？」

弁護人「しかしあくまでもこの裁判は！」

響き渡る裁判長の本槌の音。

裁判長「静粛に！一旦休廷とします」

◆第三幕 火種

榎田脳科学研究所。澤のもとに訪れた、新聞記者の目下部太一。

日下部「澤さーん、いますか？いたらお返事お願いします！・・・入りますよ。後から不法侵入なんて言いつこ無しですよ・・・ワッ！・・・何してんですか？・・・いるなら返事くらいしてくださいよ」

頭に沢山の電極を付けた澤。

澤「なんか用？」

日下部「とりあえず、はずしてもらえませんか？」

澤「え？」

日下部「これ」

澤「ああ・・・大新聞社のエリート記者さんが随分ひまそうね」

日下部「ひどいなあ。大学時代の可愛い後輩が、可哀想な先輩を心配してわざわざ来てあげたっていうのに」

澤「別に頼んでないよ」

日下部「可愛くないいなあ」

澤「ふん！可愛くなくたって研究は出来るの」

日下部「研究も出来て可愛かったらもつといいじゃないですか」

澤「うるさいわね！大体あなたは先輩を先輩とも思っていないでしょ！」

日下部「それで、何をやってたんですか？」

澤「脳波を測ってたのよ」

日下部「脳波？なぜ？」

澤「新薬クオリアを服用してみて、通常の脳波と比較するため」

日下部「えー！自分使って実験してるんですか？」

澤「でもやっぱり駄目」

日下部「どうしてですか？」

澤「うつ病じゃない人間が飲んでも作用しないのよ。そこがこの薬のすごい所。榎田博士はドラッグ化を懸念していたの」

日下部「効き目が無いのを分かかってなんで飲んだりするんですか？」

澤「だって！何もせずにはいられないし・・・どうしても・・・どうしても信じられなくて・・・」

日下部「澤先輩・・・」

澤「クオリアを服用したうつ病患者が残酷な殺人鬼になるなんてどう考えても納得出来ないのよ。榎田博士は本当に心の底からうつ病患者達の苦しみを取り去ろうとしていた。それは間違いない。だから私は博士にここまで着いてきたの」

日下部「そうですね、新薬の認可を受けるためには長い時間と膨大な治験データも必要ですからね。それをクリアして市場にデビューしたわけですから。特に日本の新薬の認可はドラッグ・ラグと言われるくらい慎重で遅い。無くはないだろうが、日本国内で、そこまで極端な副作用を見逃すとは考えられないですよね」

澤「・・・日本国内・・・」

日下部「澤先輩？」

澤「新薬クオリアを最初に認可した国は、アメリカなの」

日下部「アメリカ？」

そこに柏木峰子が現れる。

柏木「失礼します」

澤「どちらさま？」

柏木「厚生労働省保険衛生局の柏木です。何度かお呼びしたんですが。入ってよろしいですか？」

澤「ええ、どうぞ」

柏木「失礼します。澤さん、澤リカ子准教授でいらっしやいますね？」

澤「はい、澤です。厚生労働省の方が何か？」

日下部を見る柏木。

澤「あ、大学の後輩で帝都新聞の記者をやってる日下部太一君です」

日下部「日下部です」

柏木「(会釈)失礼ですが、外していただけますか？」

澤「・・・ごめん、日下部君」

日下部「・・・わかりました。先輩、また」

澤「裁判の件ですか？」

柏木「ええ。今日伺ったのは、新薬クオリアの治験時の生データを拝借できないかというお願いです」

澤「治験時の生データ？それは検察に押収されて、すでに裁判所に提出されていると思いますが」

柏木「いえ、私が言っているのはアメリカで行った治験データのことです」

澤「アメリカで行った治験データ？・・・でもそれは・・・」

柏木「澤先生。新薬クオリアが最初に認可を受けたのはアメリカでしたね？日本はその2年後の認可」

澤「ええ」

柏木「つまり、注視すべき実験段階の生データはアメリカでのデータなんです。日本のデータは後追いに過ぎない。だからどうしてもその最初のデータを解析、分析しなければなりません。なんととしても、これ以上の、新薬クオリアによる殺戮を止めなければならぬんです」

澤「そんな！まだクオリアが原因だとは。それにデータはすべて、アメリカン製薬の管理下にあったのでここにはありません」

柏木「もう一度探してみたいんです。あなた、あの榎田博士が、ご自分の研究データをコピーも取らずに人に預けるとお思いになりますか？」

澤「・・・あ！でも、それならアメリカン製薬にデータの提出を求めれば」

柏木「やりました」

澤「じゃあ」

柏木「無駄です。そのデータはあなたが見つけ出さない限り二度と人目に触れることはない」

澤「そんな」

柏木「アメリカン製薬はダミー会社です」

澤「ダミー会社？いったいなんの？」

柏木「アメリカ国防総省。ペンタゴン」

◆第四幕 決意

柏木N「榎田の行方は今だ不明だった。澤リカ子は本当に榎田の行方を知らないのか。それともシラを切っているのか。その判断はまだつかないでいたが、数日後、例の警察署長から連絡が入った」

警察の取調室。マジックミラーから澤を見つめる柏木。

警察署長「柏木課長、ご連絡した通り、あの少女が榎田秀司博士の患者で、クオリアを服用していたために起こしたとされる殺人事件の容疑者・本庄まりです。澤准教授は」

柏木「存じてます。先日、直接お話を伺いました」

署長「ほう、直接お会いに」

柏木「ええ」

署長「何かつかめましたか？」

柏木「……」

署長「おっと、いかんいかん、失礼しました。政府直々のお仕事に、所轄の署長なんぞが首を突っ込んだら、いくつ首があってもたりません。ははは。では私は所用がありますので失礼します」

柏木「はい」

柏木N「不思議な少女だった。まるで殺人犯などには見えなかった」

警察の取調室。拘束された本庄まり。

澤「それから？怖がらないでいいから話してみて」

まり「榎田先生は？先生はいないの？」

澤「うん。先生、今日はいないの」

まり「なんだ、寂しいわ。先生じゃなきゃ何も話したくない」

刑事「あのなあ、お前は殺人者なんだよ？寂しいから話さないなんて理屈が通ると思ってるのか？」

澤「刑事さん。まりちゃん、榎田先生ね、今すごいピンチなの。それを助けてあげられる

のはまりちゃん、あなたなの。お願い、ゆっくりでいいから質問に答えて。ね？」

まり「まりが、先生を助けるの？本当に？」

澤「うん。本当」

まり「(うなずく)」

澤「じゃあ。あなたが人を殺したのは覚えている？」

まり「うん、覚えている」

澤「どうやって殺したかも覚えてる？」

まり「うん、覚えている」

澤「じゃあ、どうして殺したのかは覚えている？」

まり「……」

澤「まりちゃん？」

まり「使命なの。使命ってわかる？」

澤「使命？……」

まり「浄化のため。世界を平和にするのよ」

澤「浄化……平和……？なんでそう思うの？」

まり「榎田先生がそう言ったの」

澤「先生が?」

まり「まり、先生のピンチ救えるのかしら」

澤「・・・そうね」

まり「バカな人間が多すぎるんだって」

澤「バカ・・・」

まり「榎田先生がそう言ったの」

澤「・・・」

刑事「もうやめましょう、こんな取り調べいくらやっても意味がない。バカらしい!」

澤「いいえ、そんなことない」

刑事「・・・は?」

澤「この子は榎田博士の患者よ。うつ病を患い、博士によってクオリアを処方されていた」

刑事「だから?」

澤「だから、この子の言葉だったら、榎田博士は聞く耳を持つかもしれない」

刑事「どういうことですか?」

澤「詳細はよくわからないけれど、博士はこの子に何かを伝えていた。だから・・・彼女の言葉を、メッセージを博士に届けることが出来たら、博士ともう一度、会うことが出来るかもしれない」

刑事「だけど、ご自分の意志で失踪したとは限らないでしょう」

澤「どう意味ですか?」

刑事「つまり何者かに連れ去られたとか。すでもう」

澤「変なこと言わないでください! きっと博士はご自分が開発した薬クオリアに、殺人事件の原因があると疑われたことに耐え切れず、どこかに身を隠してるんです。真相は必ずこの私が突き止めてみせます」

◆第五幕 メッセージ

新薬クオリアの薬害裁判の第二回公判。証人として呼ばれた本庄まり。

まり「真実のみを証言することを誓います」

弁護士「それでは弁護側証人の質問を開始させていただきます。まず、あなたのお名前は?」

まり「本庄まりです」

弁護士「ご職業は?」

まり「時計の修理工です。あ、元修理工ですね。今は無職で、殺人犯です」

弁護士「・・・そうですか。時計の修理工とは珍しいですね」

まり「好きなんです、昔から時計が」

弁護士「何故です?」

まり「時計は、時間は裏切りませんから」

弁護士「裏切らないとは、どういう?」

まり「人間は言ったことも考えてることも、すぐが変わってしまうし、約束なんかもすぐ破るし、全然信用できないけど時計は、時間は変わることなく正確で誰にも平等で信用できるのです」

弁護士「・・・なるほど。ところであなたは、一年前からご病気をされていましたよね?」

ご病名は?」

まり「うつ病です」

弁護士「誰に治療を受けていたんですか?」

まり「榎田先生です」

弁護士「榎田秀司博士で間違いないですね？」

まり「はい」

弁護士「榎田先生はどんな方ですか？」

まり「とても優しく、親身になって話を聞いてくれました」

弁護士「信頼をよせていた」

まり「はい、とても」

弁護士「この先生なら、自分の病気を治してもらえらると思いましたが？」

まり「はい、思いました」

弁護士「先生の治療はカウンセリングだけでしたか？」

まり「いえ、お薬ももらっていました」

弁護士「どんなお薬か説明は受けていましたか？」

まり「はい、先生が開発されたクオリアという薬でした」

弁護士「クオリアですね。その薬を飲むとどんな効果を感じましたか？」

検事「異議あり！ 弁護人は科学的根拠に基づかない心証を誘導しようとしています」

弁護士「では質問を変えましょう。あなたは時計が好きだとおっしゃいましたね。いつも時間は気にされていた？」

まり「はい。1分に1回は時計を見る癖があります」

弁護士「それは大分お忙しい。クオリアを飲んだ後はいかがでしたか？」

まり「クオリアを飲むと、時計を見る時間は1時間に1回になりました」

弁護士「ではぜひふんと生活の上ではゆったりしましたね」

まり「はい。病気になってからは何かいつも追われているようなすごく切迫した気持ちで生活していたんです。常に死神に見張られているような気分です」

弁護士「死神。その死神も薬によって姿を消した」

まり「はい」

弁護士「もうひとつだけ質問です。あなたは今回あなたが起こしてしまった事件、この殺人を新薬クオリアのせいだと感じていますか？」

まり「いいえ」

弁護士「以上です」

検事「では反対尋問に入らせていただきます」

まり「・・・・・・」

検事「まずはじめに本庄まりさんにお話ししておきます。この裁判はあくまでも被告・アメリカン製薬の発売したうつ病治療薬クオリアの薬害裁判です。告発者はあなたと同じようにこの薬を飲んで殺人を犯してしまった方々の親族です。その中にはあなたのご両親もいらつしやる。つまりあなたのお父様とお母様は、今回のあなたの犯罪の原因はクオリアにあると考えているわけです。私もそう思っています」

弁護士「異議あり！ 検察は独自の見解を証人に植え付けようと意図しています」

検事「では質問を変えましょう。あなたは先日行われた警察の取り調べで、榎田博士の話をしたそうですね」

まり「はい、しました」

検事「榎田博士はあなたにメッセージとも受け取れる言葉を残している。博士はあなたになんとおっしゃったんですか？」

まり「・・・・・・」

検事「なんとおっしゃったんですか？」

まり「クオリアは、世界を浄化する。クオリアは世界を平和に導く」
弁護士「異議あり！証人の発言は根拠も証拠もない検察による荒唐無稽なでっちあげだ！」
検事「でっちあげなどではない！この証言は取り調べに同席した国選精神科医のサインも入った正式な調書に記載されている。やはり榎田は何らかの意図をもってクオリアを開発したんだ！うつ病の治療以外の何らかの意図を！」

弁護士「・・・まさか」

検事「裁判長、この調書を検察側証拠第4号として提出いたします」

弁護士「・・・しかし検察はその証言を持っていったい何を証明しようとしているんだ？」

検察「(苦笑) あなたらしくもない。先輩である元検事のあなたに事件解明の基礎を聞かれるとは。動機です。榎田秀司の動機を知りたい」

まり「先生はこうもおっしゃってました」

検察「なんと？」

まり「誰がために鐘は鳴る」

響き渡る鐘の音

◆第六幕 推察

榎田脳科学研究所。必死にアメリカでの治験データのコピーを探す澤。

澤「ないないない！もー！見つかりっこないわよ、今さら！・・・(ため息)」

日下部「おー、荒れてますねえ」

澤「なんだ、日下部君か。別に、荒れてなんかいないわよ・・・探し物が見つからないだけ」

日下部「例のデータですか？厚生労働省の役人に頼まれた榎田博士のマル秘データ」

澤「あるかどうか分からないのを探しようがないわよ」

日下部「あれはどうです？外付けのハードディスクとか見当たりませんか？」

澤「とっくに探した。見てよ、保管されてるラベルのないCDRやDVD、これ全部チェックしたのよ。もううんざり、あー、ちよっと肩もんで」

日下部「あとはどこですかね、データを保管しておける場所って」

澤「博士のパソコンはもちろん、大学のホストコンピュータもすべて確認してもらったのよ。お手上げ」

日下部「ところで頼まれていた広告、今朝の朝刊に出しておきましたよ」

澤「本当！？ありがとう。だけど三行広告なんかで博士に伝わるかしら」

日下部「さあ。博士は長年うちの新聞の読者だったんですよね？」

澤「ええ、そう」

日下部「博士がまだ生きてるとして」

澤「生きてるわよ！」

日下部「すいません・・・そしていまだに毎朝ゆっくり朝刊を読む習慣を持ち続けていてくれれば、澤先輩の出した広告を読む可能性はかなり高いんじゃないですか？」

澤「だといいいけど。お金無くてたったの三行だからなあ」

日下部「あまりと一緒に世界を浄化しませんか？株式会社クオリア“ちよっと婉曲的過ぎましたかね？”」

澤「博士の名前出したり、あからさまには出来ないもの」

日下部「ところでデータですけど、澤先輩のパソコンの中は探したんですか？」

澤「え？探してないけど。パスワード入れなきゃ起動しないし、誰かが勝手にファイルを

移したりは出来ないわよ」

日下部「一応見てみましょうよ」

澤「ないって言うてるでしょ」

日下部「万が一ってこともあるでしょう？ほら早く」

澤「えー、もう疲れたよ（ため息）」

自分のパソコンをチェックする澤。

澤「やっぱり無いわよ」

日下部「システムのフォルダには？」

澤「全部見た。ありません。あるわけないじゃない、セキュリティはしっかりやってるもの」

日下部「そっか」

澤「ああ、メールがたまってる。ついでにチェックしておこ」

メールをチャックし始める澤。

澤「あれ？うそ・・・」

日下部「どうしました？」

澤「博士からメールが来てる・・・」

日下部「榎田博士から！？」

澤「やっぱり生きてたんだ」

日下部「すげえ、我が帝都新聞、見直した」

澤「アドレスは、見たことないけど、ほらここ、件名に“広告のお礼”だって！」

日下部「びっくりだなあ・・・でもこの通信記録で博士の居場所も特定できますね」

澤「とりあえずメール見てみなきゃ」

日下部「・・・なんだこれ？数字とアルファベットだけだ」

澤「TAGATAMENIKANENANARU 901ia・・・？」

日下部「たがためにかねわるん！？最後の901iaってなんだろう？」

澤「これ、クオリアって読めるんじゃない？」

日下部「わー、本当だ、90でクオ、1をエルの小文字としたら1iaでリア、まさにクオリアだ」

澤「だけど、このアルファベットと数字にどんな意味があるのかしら・・・」

日下部「あれ？このアドレスのドメイン・・・tagatameni.kanewanaru.com（てが）どは、も
しかして！どいて・・・wwwドット・・・」

澤「どうしたの？ちよっと、なに？」

日下部「独自ドメインがあるってことは、レンタルサーバーを使用してるはずなんです。

そのサイトにアクセスして・・・よし、来たー！」

澤「アカウントとIDパスワードの入力欄ね」

日下部「アカウントはTAGATAMENIKANENANARU、そしてパスワードは
たぶん901ia・・・どうだ！」

澤「・・・開いた・・・」

日下部「見つけましたね、榎田博士の隠しマル秘データ」

澤「でもどうして博士はデータを私に・・・」

そこに刑事が訪れる。

刑事「澤先生」

澤「あ、刑事さん。後輩の日下部くんです」

草壁「どうも帝都新聞の日下部です」

刑事「記者さんですか。ちょうどいい、折り入ってご相談がありました」

澤「・・・はい」

刑事「例の本庄まり、榎田博士の患者の」

澤「ああ、先日、クオリアの薬害裁判に証人として出廷したんですよね」

刑事「そうなんです。その時彼女はまた新たな証言をしましてね」

日下部「何を言ったんですか？」

刑事「はい。榎田先生はこうもおっしゃってました。『誰がために鐘は鳴る』意味お分かりになりますか？」

◆第七幕 デコード

厚生労働省保険衛生局。鳴り響く電話の音。受話器を取る柏木峰子。

柏木「はい、もしもし保健衛生局・・・はい、柏木は私ですけど。あ、澤先生、なんですって！データを発見した！はい、すぐ伺います！高山君、私出かけるから後頼んだわよ」

高山「え、あと30分で会議始まりますよ！ちよ、ちよっと課長！」

足早に響くヒールの音。

柏木N「榎田秀司の身柄を確保する。上からの命令とはいえ、厚労省のキャリアがする仕事とも思えず、当初は憂鬱な気分です。事件を探っていた私だったが、いつの間にかクオリアの事が頭から離れなくなっていた。榎田秀司、新薬クオリア、そしてアメリカ国防総省ペインタゴン。私は、開けてはならないパンドラの箱を、開けてしまったのではないだろうか。不安と好奇心の混じり合った妙な高揚感が、私を突き動かしていた」

榎田脳科学研究所。

柏木「なるほど。つまり、彼が生きているという前提で、榎田博士に向けた新聞広告を出した。そこには榎田博士と彼の患者、本庄まりとの間で交わされたメッセージが織り込まれていた。その広告を発見し意図をくみ取った榎田博士から澤先生あてにメールが届き、そしてそのメールに書かれていた暗号を日下部さんが解読して、榎田データを手に入れた」

澤「わからないのは、博士はどうして私にデータを送ってきたんでしょうか？私たちがデータを探していることなんて知らないはずなのに」

刑事「もしかして？」

日下部「もしかして？」

刑事「挑戦ではないでしょうか」

澤「挑戦？何に対して？」

刑事「現代社会に対して、とでも言いましょうか」

日下部「世界を浄化する・・・ってやつですか？」

刑事「うん・・・動機はよくわからないけれど、ここまで調べてきてある確信が生まれました」

柏木「やはり？」

刑事「はい。榎田秀司はうつ病の治療とは別の、おそらく社会を混乱させる意図をもってクオリアを開発したんです。彼曰く、世界の浄化、世界の平和のために」

澤「でも先生は！」

日下部「澤先輩、落ち着いて！」

澤「・・・ごめん」

日下部「あとひとつわからないのは、誰がために鐘は鳴る」ですね」

柏木「たしか、ヘミングウェイの小説のタイトルよね」

刑事「映画や舞台にもなりましたよね」

日下部「誰がために鐘は鳴る・・・鐘、除夜の鐘、時の鐘、教会の鐘、警告、合図・・・うーん、わからない」

柏木「とにかく、データの解析を急ぎましょう。このデータは私どものほうに預らせてください」

澤「・・・はい」

厚生労働省・保健衛生局の柏木の執務室。

鳴り続ける電話の音。誰も出ない様子。

近づいてくる靴音。

警備員「柏木課長、まだいらしたんですか？」

柏木「あ、いけない、眠っちゃった。ご苦勞様、もう少ししたら帰るわ」

警備員「お疲れのようですね。いえ、構いませんが、灯りがついてたものだから起きていらっしやるものだと。すみません、どうぞごゆっくり」

柏木「いいえ、ありがとう。かえって助かったわ。電灯は消して。もう行きます」

警備員「助かります。こんなご時世ですからね、いろいろうるさくって。ではよろしくお願いたします」

柏木「お疲れ様。おやすみなさい」

電灯を消し去っていく警備員。

柏木N「ここ数日はまともな睡眠がとれず、唯一安息を感じる場所は、スタッフが引き上げたフロアの西側の角に位置するこの深夜の応接スペースだった。使い込まれた茶色いソファア。味気ないモスグリーンの布製パーテーション。自分でも笑えてくるほど味気ない場所なのに、不思議と落ち着くのだ。原因に心当たりはあった。数日前から続く自宅への無言電話にかなりイライラしていたこと、時を同じくして呼び出された厚生労働大臣・新海の隠しきれない苛立ちとプレッシャー。どこにいても何となく感じている誰かの視線。自意識過剰だと言われればそれまでだけれど、私は警備員の指摘通り、かなり疲れているようだった」

厚生労働大臣執務室。

新海「蜂の巣を見つける様子を見たことがありますか？」

柏木「はい・・・テレビなどで何度か。たしかスズメバチの」

新海「そう。目印を付けられた働き蜂は、そうとも知らずに巣に帰り、まんまと人間に巣を暴かれてしまう。面白いと思わんかね？」

柏木「はぁ・・・しかしそれがなにか」

新海「ところがね、いくら巢を暴いてみても、嬢王蜂を取り逃がしてしまえば元の木阿弥なんだ。また違う場所に巢を作られて、駆除は失敗。スズメバチの脅威は消えはしないんだ」

柏木「・・・はい」

新海「榎田秀司の居所は、あとのくらいで判明しそうだね？」

柏木「榎田から届いたメールをもとに、帝都新聞の記者が目下捜索中ですが、おそらく一両日中には」

新海「・・・。わかった、続けてくれたまえ。しかしくれぐれも、嬢王蜂を取り逃がすなよ」

柏木「はい。承知いたしました」

柏木N「嬢王蜂・・・。榎田は嬢王蜂なのだろうか。榎田を確保できれば、クオリアという毒針は鎮まるのだろうか。そもそも榎田は男だから女王蜂にはなれない。男はいつだって知らぬ間に女に振り回される存在のはず・・・くだらない、どうかしてる、帰って眠らなければ。だけど例の無言電話が待っていると思うと、部屋に帰るのが億劫ね」

そこに部下の高山が現れ、電灯をつける。

高山「わ！びっくりしたあ！課長、まだいらしたんですか。ふー・・・すっかりひどい顔だなあ、まるでお化けみたいでしたよ」

柏木「うるさい。で、あなたはどうしたのよ、こんな時間に」

高山「そうだった。課長に出す報告書をまとめようと思って」

柏木「榎田について何か分かったの？」

高山「はい、榎田秀司の過去について少し」

柏木「本当！？」

高山「報告書いいですかね？面倒なんで聞いてもらっちゃっていいですか？」

柏木峰子の自宅マンション。

高山「お邪魔します。へー、ふんふん、へー、こんな感じですか？」

柏木「ちよっと、あんまりじろじろ色んなところ見ないでよね。これでも一応、独身女性の一人住まいなんだから」

高山「そうですね。じゃあ、やっぱり一応、襲つときますか？」

柏木「え？な、何よ、急に・・・馬鹿じゃないの？・・・」

高山「あははは、冗談ですよ、冗談！課長は本当に初心だなあ」

柏木「一回殺すわよ」

高山「あはは・・・すいません。あ、留守電光ってますよ」

柏木「ああ・・・いいわ」

高山「聞かないんですか？」

柏木「いいのよ。どうせ無言電話。このところずっとね。突っ立てないで適当に座って。

どうせ何も食べてなんでしょ、ビールでいい？」

高山「すいませーん。でもなんですかね、無言電話なんて。心当たりは？」

柏木「いいえ」

高山「聞いてみましょうよ、ね？」

柏木「別にいいけど、無言よ。当たり前だけど」

留守電を聞いてみる二人。
無音が続く。

高山「ふーん、気味悪いですね」

柏木「もういい？ね、飲みましよ」

高山「もう一度だけ」

柏木「ええ・・・もう」

仕方なくもう一度流す柏木。

高山「なにかの音が聞こえませんか？し！ほら・・・かすかですけど・・・なんだろう？
時計の音みたいだな・・・あ、切れちゃった」

柏木「(ため息)」

ビールを飲む二人。

柏木「ところで、調べてくれた榎田秀司の過去って、何か分かったの？」

高山「はい、いくつか」

柏木「話して」

高山「榎田には一つ年下の弟がいたそうなんですよ」

柏木「弟？どこにいるの？」

高山「死亡しています。正確には死亡した事になっています」

柏木「なぜそんな・・・」

高山「榎田の父親なんです、外務省のキャリア組でしてね、こちらも他界されましたが。
各国の大使館員を歴任したようなんですが、ある時期、インドに赴任していて、その時、

榎田の弟が誘拐されました」

柏木「誘拐？それで、どうなったの？」

高山「地元警察も全力で探したようなんですが、マフィアたちは都市部で誘拐した子供たちをネパールとの国境付近の山岳部に隠して洗脳していくんだそうですよ。結局見つけることが出来ず捜査は打ちきり。遺骨もないまま葬儀をあげたそうなんです・・・しかしひどい話だよなあ」

柏木「・・・」

高山「それから関係ないかもしれませんが、榎田はインドに留学経験があります」

柏木「え？」

高山「情報処理の博士号を取得するために3年間。名門のジャワハルラー・ネルー大学です」

◆第八幕 楽園

榎田の隠れ家。部屋には、静かにパソコン(またはタブレット)に向かう少女・ユリ。立ったまま眠る男・ドウジ。20年間、本を読み続ける女・フミコ。

その中央でくつろぐ榎田秀司。その傍らに座り、寄り添う少年・カズマ。

ゆっくりとカズマの頭をなでる榎田。

カズマ「博士・・・」

榎田「ん？なんだ？どうした、カズマ」

カズマ「博士、ボクが今何を考えているか分かりますか？」

榎田「(微笑) さあ、なんだろうな。今夜のミートパイの塩加減のこと、犬でもネコでもないペットを飼う夢、あとは・・・来年のエイプリルフールの嘘を何にするか、どうだい？この中に正解はあるかい？」

カズマ「ううん、ひとつも当たっていませんよ」

榎田「(微笑) それじゃあ答えを。急がないとドウジが目を覚ます」

カズマ「ふふふ。では正解を。時間が止まってくればいいのに」

榎田「時間か。まりはどうしているかな。元気だといいいんだが」

カズマ「まりは大丈夫。あの子はともガッツがある。自分を持つてる」

榎田「そうだね。とてもいい子だよね」

カズマ「博士、ボク怖いんです！とても・・・」

榎田「何を怖がっているんだ。何も心配などいらぬ。ここは安全だ。私たちだけの楽園だよ」

カズマ「そうじゃなくて！・・・いつか先生とお別れする日が来るんじゃないかって・・・それだけがボクを苦しめるのです」

榎田「カズマ」

カズマ「博士を守る為なら、ボクはいつだって死ぬるし、そうすることが出来たなら、それ以上の幸せなんてないかもしれない。けどもし、もし博士がボクより先に死んでしまふ事があつたらと思うと・・・あー！胸がどきどきする！頭が割れそうだ！博士、怖いよ、怖いよー！」

榎田「カズマ、落ち着くん。ほらさあ、飲みなさい。また菓の時間を守らなかったのかい」

カズマ「ごめんなさい！ごめんなさい！いい子にするよ！いい子になるから！」

榎田「カズマ！さあ早く、クオリアを、クオリアを飲むんだ！」

菓を飲みこむカズマ。

カズマ「(荒い息) イヤだ！嫌だよ！もうぶたないで！ごめんなさい、許して・・・ママー！」

榎田「カズマ！」

カズマを抱きしめる榎田。次第に菓が効き静かになるカズマ。眠ってしまふ。

ユリ「博士、メールよ」

榎田「(うなずく) さすが澤君。なかなか早いな」

ユリ「クオリアのアメリカにおける治験生データ、確かに受け取りました」

榎田「それだけかい？」

ユリ「ううん。すぐ行きます。私は博士を信じています。澤、だって」

榎田「(大笑い)・・・澤君らしいな」

時計を見るユリ。

ユリ「博士、そろそろ5時になるわ」

うなずく榎田。

ユリ「送信」

榎田「さあ、諸君。鐘を鳴らそう」

響き渡る5時を告げる鐘の音。

男は目を覚まし女は本から目をあげて、ユリが「夕やけ小焼け」を歌い始める。

そっと目を覚まし、ユリと手をつなぐカズマ。

荘厳に広がっていく歌声。

◆第九幕 診察

榎田を囲み円になる患者たち。診察の時間が始まる。

榎田「今日の診察は誰からだったかな？」

ユリ「ふふふ」

榎田「何がおかしいんだい？ユリ」

ユリ「だって博士の診察って診察らしくないから、いつだって私、おかしくって」

カズマ「僕は大好きさ！博士の診察時間がなかったら、とっくに生きちゃいないよ」

榎田「それは違うよ、カズマ」

カズマ「あ、そうでしたね。ごめんなさい」

榎田「いつも話しているだろう。君たちは選ばれた者たちなんだって」

ユリ「選ばれた者たち」

榎田「こんな話は知っているかい？ある元うつ病患者の男が世界を浄化するために、異分子である他の民族を迫害し粛清し、永遠の楽園を作ろうとしたんだ。優れた人間だけを残して、新しい世界を夢見た男、その男の名は・・・アドルフヒトラー」

カズマ「ヒトラー」

榎田「彼の夢は道半ばで潰えたが、私には彼が間違っていたとは思えない。だってそうだろう？今の世界を見てみるがいい。アラーとイエスの終わりのない戦い、金で金を産もうとするまやかしの錬金術師たち、水銀まみれの豚肉に、ウランをまぶした魚の群れ、血で血を洗う子殺し親殺し！浄化するためには淘汰は必要悪、いや、プロセスにすぎないんだ」

カズマ「すごい！博士が、ヒトラーなんですよね？」

榎田「首を振り」ヒトラーは、クオリアだよ」

ユリ「クオリアが、ヒトラー？」

榎田「(うなずき) 命令を下すのは、クオリアだ。私はそうだな、さしものゲッベルスといったところかな(笑)」

フミコ「ゲッベルス。パウル・ヨーゼフ・ゲッベルス。1897年生まれ。心理学を研究し、プロパガンダの天才と称され、アドルフ・ヒトラーの政権掌握とナチス党政権下のドイツの体制維持に辣腕を發揮した。敗戦の直後、家族とともに自殺。47歳だった」

榎田「(手をたたき) さすがだ、フミコ。ありがとう」

ユリ「私は、クオリアを信じてる」

カズマ「僕も」

榎田「クオリアは、愛を形にしたものなんだ。さあ、診察を始めよう。そう、フミコ、おいで」

歩みでるフミコ。

榎田「今日はどんな本を読んでいるんだい？」

フミコ「ドストエフスキーの悪霊です。これで899回目ですけど」
榎田「そうか、あと一回で900回なんだね」

フミコ「次はいつ読むか分からないけど、とても好きな本です」
榎田「一度聞いてみたかったんだが、20年間、片時も本を手放したことがない君にとって、最高の一冊と言ったらなんだろう。教えてくれないかい」

フミコ「(目を輝かせ)なんだろう、私にとっての最高の一冊・・・考えたこともなかったわ・・・そうだ、エルフ・・・片足ダチョウのエルフ！」

榎田「どうしてその本なんだい？」

フミコ「・・・初めて読んだ本が、エルフだったの」

榎田「その本は、誰が君に与えたんだろうか？思い出せるかい？」

フミコ「・・・」

左右に大きく振られる榎田の指を、じっと見つめるフミコ。

榎田「本から目をあげると君の前には、見たくない光景が広がっていたんだね。だから君は本の世界の住人になった。いいんだ、君は間違っていない。だけど、君のほうが隠れているなんておかしいと思わないかい？さあ、一緒に君を苦しめているやつをやっつけよう」

フミコ「・・・」

榎田「君に本を与えたのは誰だい！？」

警報が鳴り響く。

榎田「診察を続けよう」

部屋に飛び込んでくる日下部。治療を中止する榎田。

日下部「榎田博士、お久しぶりです」

榎田「・・・君は・・・ああ、澤君の後輩の」

日下部「日下部です」

榎田「うん、思い出した。たしか、帝都新聞の記者だったね。なるほど、あの広告は君のアイディアか」

日下部「いえ、考えたのは澤先輩です。僕はただ入稿しただけです」

榎田「それで、どうしてここへ」

日下部「いえね、先生がくれたメールから追跡したら、この住所にたどり着きました」

榎田「そうじゃなくて。どうして一人で来たんだい？澤君をおいて」

日下部「そりゃあ、こう見えても新聞記者ですから。スクープ、欲しいじゃないですか」

ドウジが後ろから日下部の頭を殴る。

日下部「うわ！・・・あ・・・」

気絶する日下部。

榎田「さ、続けよう」

時計の針の音だけが響いている。

◆第十幕 アルゴリズム

柏木N「部下の高山が掘り起こしてきた榎田秀司の過去。榎田に一つ年下の弟がいた。それがどんな意味を持っているのか、それとも意味などないただの悲しい昔話なのか。なかなか揃わないパズルのピースに行き詰りを感じていた時、帝都新聞の記者、日下部太一が榎田秀司の居場所を突き止めた時、澤リカ子から連絡が入った。小さな希望の光に息苦しさを感しながら、私は担当刑事と共に榎田脳科学研究所に向かった。しかし待てど暮らせど、日下部太一が現れることはなかった」

澤から連絡を受け研究所に集まった柏木と刑事。

なかなか日下部が来ない事をいぶかしむ。

刑事「どうしたんですかね？日下部君は。もう2時間ですよ」

澤「すみません・・・」

刑事「榎田秀司の居所を突き止めたって言うてきたんでしょ？」

澤「はい。博士から来たメールをたどって居場所を特定できたと」

刑事「どこだったんですか？榎田のアジトは」

澤「アジトなんて、人聞きの悪い！」

柏木「それで、どこにいたの？榎田博士は」

澤「それは、言ってませんでした」

刑事「うーん、それさえ分かれば管轄の県警に頼んで身柄を確保してもらえるんですけどね。あ、まだ逮捕状が出てるわけじゃないから確保じゃなくて保護になるのか？・・・どっちでもいいから早く終わらせたいなあ」

柏木「警察による保護は、少し待ってもらえませんか？」

刑事「なぜですか？」

柏木「・・・それは、アメリカでの治験データについて博士本人から、直接説明を伺いたいからです。警察に身柄を取られたら別件だろうと何だろうと強引に隔離して、簡単には榎田には近づけなくなるわ」

刑事「私に怒らないでくださいよ」

澤「とにかく、彼は少し軽く見えるけど約束は必ず守る人だから。すみません、もう少し待っていてください。私、帝都新聞の編集部に行ってきます。着いたら連絡しますから、すみません、お願いします！」

あわてて出かけてしまう澤。

刑事「ああ、行っちゃった。ところで、例のデータはどんな感じですか？なにか分かりました？」

柏木「まだ解析が始まったばかりなので何とも言えませんが・・・」

刑事「教えてくださいよ、ちゃっとだけ、ね？」

柏木「・・・アメリカで認可されたクオリア。そして日本で認可されたクオリア。それらをそれぞれの初期の治験データとも照合していった結果、ある事実が判明しました。二つのクオリアのアルゴリズムが完全には一致しなかったんです」

刑事「・・・アル、アルゴ？なに？」

柏木「つまりこの二つは、ほぼ同一ではあるけれど、完全には同一とは言えないという結果が出たんです」

刑事「……」

柏木「クオリアは改良されている。榎田博士は何をしたんでしょうか？アメリカで販売されているクオリアでは殺人など起きていません。しかし日本のクオリアは殺人事件を起こしている。……澤さんは、知ってたんじゃないですかね？」

刑事「澤さんが？なにを？」

柏木「榎田秀司の、動機を」

◆第十一幕 取引

クオリア薬害裁判裁判。響く木槌の音。

裁判長N「一旦休廷とします。検察官、弁護人は控室へ来るように」

控室で話し合う検事、弁護士、そして裁判長。

検事「何を言ってるんですか！ここまで来て今更そんな取引に応じられるわけがないでしょう！まったく……」

裁判長「まあまあ、そんなにカリカリしたところで、何がどうなるわけでもありませんでしょう」

検事「しかし！」

弁護士「(高笑い)」

検事「何がおかしいんですか？」

弁護士「いえ、昔の自分を思い出してしまって、つい」

裁判長「検察側の気持ちも分からないではないけれど、アメリカン製薬が原告団側の要求通りの賠償金を支払うと言っているわけだから。どうでしょう、起訴を取り下げて手打ちにしませんか？」

検事「手打ち？馬鹿な！」

弁護士「馬鹿はどっちだ！」

検事「腐ってる！裁判長、あなたまさか」

裁判長「まさかなんですか？法廷を侮辱するつもりですか？」

検事「……」

弁護士「気張ったってしょうがないだろう？」

検事「気張る気張らないの問題じゃない！私は法律を扱うプロとして、真実に行きつきたい。それだけだ！」

弁護士「真実？真実なんてどこにある？」

検事「なに？」

弁護士「真実なんていうのは、こっちから見ればこっちの真実。あっちから見ればあっちの真実。表裏一体、360度、ぐるっと回ったって、決まってる決まってるはしないんだ」

検事「……それが法律家のいうセリフか？あんたいつから……」

弁護士「裁判長、皆さんを部屋にお呼びしてもよろしいでしょうか？」

裁判長「いいでしょう。お呼びください」

部屋に入ってくる原告団の面々。

検事「あなたがた・・・どうしたんですか？」

弁護士「みなさんは、君なんかより物わかりが宜しいようだよ」

原告団1「検事さん、すみません」

原告団2「もう、なんだか、疲れてしまいました・・・」

検事「何を言ってるんですか！この裁判は、クオリアが原因で殺人を犯してしまったあなた方の大事な家族の薬害裁判なんですよ」

原告団3「それはわかっていますが・・・」

検事「だったら！だったら、真実をつきとめるために、一緒に戦いましょうよ」

原告団4「しかし、裁判に勝ったからって、息子が救われるわけじゃないし」

原告団1「そうだ。勝とうが負けようが、娘は殺人犯だ。クオリアの真相なんかより、娘の将来のためにしてやれる事をしてやりたいんだ！」

検事「金、ですか？」

原告団3「そうじゃない！・・・そうじゃないけど・・・」

原告団4「ドウジ・・・ドウジ！（泣き）」

検事「お気持ちわかります・・・ですが！自分たちさえ良ければそれでいいんですか？ここで真相が闇に沈めば、ますますクオリアの被害者が増えていくんですよ！」

喜和子「カズマは！・・・私の弟の赤井カズマは事件を起こした後、失踪しています。あなたは事件の真相とか、榎田博士の動機とか、そんなことばかりが気がかりなようだけれど、私はカズマの居場所を知りたい。どこで何をしているのか、生きていますのか死んでいるのか・・・それさえもわからない今・・・この裁判にどんな意味があるんでしょうか・・・教えてください・・・教えてください・・・」

検事「それは・・・この裁判の意味は・・・」

裁判長「意味なんてないですよ」

検事「なんだと？」

弁護士「繰り返すようだが、一連の殺人がクオリアのせいであるという前提で話をするのはやめて頂きたい！」

検事「ならば何故アメリカン製薬は賠償金を支払うと言うんだ」

裁判長「(笑) それじゃあ教えてあげましょう。慈悲ですよ、慈悲。」 神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる”。ヨハネの手紙、第5章14節から15節は、そう教えています」

鐘の音。

◆第十二幕 呪縛

時計の音の中、目が覚めると縄で縛られている日下部。

榎田「殺したりはしないから安心したまえ。どうです？チェスでもしませんか」

日下部「縄を解け」

榎田「そうか、そのままではチェスは難しいか。ではどうだろう？人狼ゲームでもしようかね？私はいつも占い師にされてしまうんだが、どちらかと言えば市民を守る騎士をやってみたいんだがね」

日下部「そんなものはどうでもいいだろう！」

榎田「おやおや、芯から怒ってはいけない。冷静に怒らないければ道を誤るぞ」

日下部「ふん。道を誤ったのは、ご自分でしよう。どうせ死ぬなら知っておきたいなあ。

教えてください。どうして・・・どうしてクオリアなんか作ったんだ！？」

榎田「だから殺しなどしなさいと言っているだろう。それに最近の若者は諦めが良すぎる。たとえ殺されそうだとしても、最後まで抵抗したまえ」

日下部「やっぱ殺すんじゃないかよ！」

榎田「それで？何を知りたい」

日下部「だから、動機ですよ、動機。あなたが何故、殺人を誘発するような薬を作ったのか、それを教えてください。言っておきますけどオフレコは無し。聞いた話は記事にしませんよ。僕は記者ですから」

榎田「（苦笑）いいだろう。もともとはアメリカ軍の戦地の兵士のうつ病対策の薬を依頼されたんだ。私は脳研究の中で極めて関心の高かったクオリアに注目して、新薬クオリアの開発に成功したんだ。今までのうつ病薬と違い、副作用も極めて少ない素晴らしい薬になったよ。アメリカ国内での認可を得たクオリアは一般にも出回っていた。しかしその裏で、アメリカ軍はそれまでのデータをもとに薬に改良を加えだしたんだ。激化するイスラムとの戦い。兵士を躁状態の限界を越えた殺戮マシンにするための改良をね。だが私はその後、更にクオリアを改良していった。あるトラップを加えてね」

日下部「トラップ？」

榎田「ああ。クオリアを服用するうつ病患者がある歌のメロディを聞くと殺人を犯す。それは、（ユリ♪夕焼けこやけで日が暮れて・・・）どこでもよく聞こえてくるだろう？」

日下部「・・・なぜ、そんなことを・・・」

榎田「少し話がすぎたかな。カズマ、眠らせておあげ」

カズマ「はい、博士」

日下部「あんた、どうかしてるよ！」

日下部に注射を打つカズマ。抵抗するが眠気に襲われもぐ日下部。

榎田「日下部君、この世で一番美しいものは、何だと思えますか？」

日下部「・・・」

榎田「それはね、人間の脆弱さ、弱さですよ」

眠っている日下部。

そこに走りこんでくる澤。

澤「日下部君！・・・博士！日下部君に、彼に何をしたの！？」

榎田「眠っているだけだ・・・」

澤「彼は何も知らないんです。傷つけたくはありませんから」

榎田「よく来たね。澤君」

澤「はい。こんな所にいらっしやっただね。博士、会いたかったです」

榎田「私もだよ、澤君。さて、これからどうするかね？ここまで、すべて、君の言うとおりにしたよ」

澤「（微笑）」

榎田「なぜ彼をひとりでよこしたんだ？」

澤「柏木という厚生労働省の女性課長が嗅ぎまわっているんです。そう、博士にとっても会いたがっていましたよ」

榎田「それが？」

澤「おそらく彼女は、クオリアも、クオリアの開発者の博士のことも闇に葬ろうとするで

しょう。それは、困るんです」

榎田「アメリカの意向で開発したクオリアだが、その開発資金を提供したのは、わが国、日本だからな。暴かれたらまずい日米安保条約か。まるで子どもの頃、いじめられなかっためにガキ大将に貢物をしていたようなものだな」

澤「うまく忍び込んでスクープ記事を書いてくれることを期待していたんですが、その日のうちに突撃して撃沈するなんて思ってもませんでした。記事になって大騒ぎになれば、クオリアを葬ろうにも葬れなくなるだろうって考えてたのに」

榎田「どんな記事を書かせたかったんだい？」

澤「クオリアの開発者、榎田秀司、自殺と思われる遺体発見」

榎田「なるほど」

澤「私の母親はうつ病だった。それが原因で父親は家を出て行った。ところがある日突然、母の新しい恋人だという見ず知らずの男が狭いアパートに転がり込んできたわ。それから毎晩、母と男は獣のように愛し合っていた。私はずっと耳を塞いでた。そうやってじっと待っていれば嫌なことはいつの間にか消えてなくなると思いながらずっと耳を塞いでた。だけどもある日、母親が出かけて留守にしたときに……男が私を……。それを知った母親は私をなじり、男に包丁を向け、男も怒り狂い……。気が付いたら母が血まみれで倒れていたの。男も一緒に。じっと待ってても嫌なことは消えてなくなりはしなかった。男が母を殺して逃げた、私はそう思って警察に電話をしようと思ったの。でも、よくみると私の手は母の血で真っ赤に染まっていた。その時、流れてきたのよ。あの曲が」

『夕焼け小焼け』が聞こえてくる。ユリが歌っている。

澤「博士、クオリアは本当に素晴らしい薬だわ。クオリアを飲むと私は、母と一体になれる。母の主観的体験による質感を共有できるのよ。私は母を殺してなんかいない、母も男を殺してなんかいない。男が母を殺して、自殺したの！そうでしょ、博士！？そうだと行って！」

榎田「その通りだ、澤君。君は何一つ間違ってるなどないよ」

澤「……博士……クオリアを守りたいの。博士が私のためにクオリアに込めてくれたメッセージを、私、守りたいの。クオリアを無くしてはだめよ。愛する者と一つになって、死んでしまったとしても一つになって……。はははははは……」

榎田「その通りだ、お互いに望むものをクオリアは与えてくれた。澤君。あと私に望むことは、何かあるかい？君の為なら、何でもしよう。さあ、言っごらん。……リカ子」

澤「死んでくださいますか？私のために。博士にすべての罪を差し上げますわ」

榎田「……いいだろう。愛する君のために、全ての罪を飲みほそう」

澤が渡した毒薬をワインに落とし飲みほす榎田。

ゆっくり椅子にもたれ、うなだれる榎田。

榎田の脈を取り、死亡を確認し、ひざまづき祈る澤。

ひびきわたる讚美歌。

◆第十三幕 マリの涙

検察庁。検事の部屋。

喜和子「カズマはどうなるんでしょうか……」

検事「……大丈夫、今は警察病院に保護されていますから安全です」

喜和子「だけどやはり・・・訴えを取り下げることには同意なんかするべきじゃなかったのかもしれない・・・」

検事「過ぎたことを悔やんでも仕方がない。確かに、クオリアの薬害裁判はあんな形で終わらせるべきじゃなかった。だがすでに、あなた方はアメリカン製薬側の示談を受け入れてしまった。しかし・・・」

喜和子「・・・しかし？なんですか？」

検事「私はこの事件を追求し続けます。自分の気が済むまで、何年かかっても」

喜和子「検事さん・・・ごめんなさい」

検事「え？なぜ謝るんですか？」

喜和子「あなたは本当に私たち、クオリアの薬害被害者のために戦ってくれていた。それなのに、私たちは本来同志であるはずのあなたを裏切った。裏切って、アメリカン製薬の示談を承諾してしまった。だけど信じてください！私は・・・私たちは、賠償金欲しさに退いたんじゃないやありません。本当です、ただ、意味の見いだせない裁判に、疲れ果ててしまったんです」

検事「わかっていますよ」

喜和子「それなのに、これからのことが不安で、途方に暮れたすえに結局、私はまた、あなたを頼ってしまった。ひどい話ですよ」

検事「あまり自分を責めるもんじゃやない。あなたは悪くなどありませんよ。悪いのは、クオリアなんかを開発して世の中を混乱に落とし入れ、命を絶ってしまった榎田秀司ですよ。だから、あなたは、これからのご自分とカズマ君の事だけを考えていけばいいんです。私も、お手伝いしますから」

喜和子「検事さん・・・ありがとうございます」

検事の電話が鳴る。

検事「失礼・・・わかった。これからすぐ向かう。行きましょう」

喜和子「行くって、どこへ？」

検事「拘置所です。本庄まりにもう一度話を聞いてみましょう」

拘置所の接見室。検事と同席した喜和子。

手を回し続けるまり。時々、時計を確かめて納得している。

検事「本庄まりさん、お久しぶりですね」

まり「・・・」

検事「・・・クオリアの薬害裁判の際に」

まり「覚えてます。クオリアを目の敵にしていた、声の大きな検事さんですよ」

検事「・・・声が大きかったどうかは分からないが」

まり「大きかったわ。とても」

検事「・・・そうですか・・・それは失礼しました」

まり「謝ることなんてありませんよ。大きな声は時々、好きですから」

検事「・・・今日、来たのはあなたに確かめたいことがあって」

まり「誰ですか？このきれいな女性は」

検事「ああ・・・カズマ君のお姉さん、赤井喜和子さんです」

まり「！・・・カズマの・・・お姉さん」

喜和子「こんにちは・・・まりさん」

まり「会いたいな、カズマに。ユリにもファミコにも・・・みんなどうしているんだろ・・・
会いたいなあ」

検事「拘置所での生活は不自由なですか？いや、不自由だからだとは思いますが、何か
欲しいものとかはありませんか？」

まり「いえ、みなさん良くしてくれますから。あ、ただ」

検事「ただ？」

まり「拘置所の部屋に、無理を言っただけの時計を付けていたんですけど」

検事「ええ、聞いていますよ。あなたは時計の無い空間では、ひどく動揺してしまうん
ですよ」

まり「そうなんです。時計は、時間は裏切りませんから。でも」

検事「何か問題が？」

まり「部屋につけていただいた時計、1分が少しだけ短いんです。つまり、ほんの少しだ
け進むのが早いです。1分間を、0.0025秒早く進みます。つまり1時間では0.
15秒、1日では3.6秒も進んでしまうんです」

検事「・・・」

まり「人を殺して、逮捕されて、あの部屋に時計が来てからちょうど3か月経ちました。
すでに5分以上あの時計は進んでいるんです」

喜和子「・・・どうして、そんなことがわかるんですか？」

まり「だって、私はずっと昔から、1分に1回時計を見てきたんです。榎田先生に進めら
れてクオリアを飲むようになってからも、1時間に1回は時計を見てきたんですよ。それ
に私は時計の修理工だから、壊れた時計は直してあげたい。でもさすがに、修理の工具の
申請は却下されてしまいました。自殺の恐れがあるからって」

喜和子「・・・」

まり「だけど、この部屋の時計は大丈夫。ぴったり合っています」

検事「これは、電波時計ですね」

喜和子「電波時計？」

まり「ええ。標準電波の送信局から送信される原子時計による日付・時刻情報のデジタル
信号を受信して、自動的に時刻を合わせる時計が電波時計です。電波が正常に受信できる
環境に限り、秒単位で正確な時刻を知ることができます」

検事「わかりました。あなたの部屋の時計も電波時計に変えさせましょう」

まり「素敵。ありがとうございます。声の大きな検事さん」

検事「・・・その代わりと言っただけなんです、あなたに教えてほしい事があります」
まり「わたしに教えてほしい事？」

検事「あなたは裁判の時、おっしゃっていましたよね。榎田先生はこうも言っていた。誰
が為に鐘は鳴ると。警察での取り調べに対しても、榎田博士は世界を平和に導くために新
薬クオリアを開発したんだと供述している。つまりあなたたち榎田博士の患者は、うつ病
の特効薬であるクオリアを飲み、劇的な病状の改善の代償として、榎田秀司の無差別殺人
の計画に加担させられたのではないのかという事です。自覚的であろうとなかろうと」

喜和子「それはつまり・・・カズマたちは操られていたという事ですか？榎田秀司のクオ
リアを使った殺戮計画の為に・・・」

検事「私は、そう考えています」

喜和子「そんな・・・そんなこと許せない！カズマを、私の可愛い弟カズマを殺人犯に仕
立て上げたなんて・・・本当だとしたら、榎田を・・・絶対に許さない・・・」

まり「カズマのお姉さん、榎田先生をそんな風に言わないで。先生は世界の浄化のために
淘汰は必要悪でありプロセスなんだと言っていたわ。そのためには、クオリアの力が必要

なの」

喜和子「動機も理由もない殺人を誘発するような、そんな薬が必要ですって!?!そんなことがあるわけじゃない!」

まり「違う!違うの!淘汰がなされることは、クオリアにとって一つの手段に過ぎないの。重要なのは、クオリアを服用したものが、新しく浄化された世界を、主観的体験による質感の共有によって、同時にイメージすることなの。だから、先生はいつも言っていた。

わたしたち、うつ病患者達は選ばれた者たちなんだって。汚れきった世界を憂い、真の幸福を求める修道者なんだって」

喜和子「修道者?」

まり「わたしたちは行くの。いつかきつと。必ず」

喜和子「どこへ行くというの?」

検事「どこに行こうとも、犯した罪は償ってもらおう。それが法治国家というものだ」

喜和子「・・・カズマも?」

検事「・・・ええ、赤井さん。罪は罪。カズマ君も公正な裁きを受け、もう一度一から歩き出すべきなんです。そのためにはどうしても知っておきたいことがある」

喜和子「・・・」

検事「本庄まりさん、榎田秀司は自殺しました」

まり「・・・え?」

検事「あなたもご存じのように、クオリアによる殺戮が始まった直後から、榎田博士は失踪し、先日、カズマ君たちと共に手柄を確保されました。榎田秀司のみ遺体という形で。

なぜ、彼は自殺などしなければいけなかったのか・・・あなたなら何か知っているんじゃないか?心当たりでもいい。彼が死んでしまった今となっては」

まり「うそ!そんなこと嘘に決まってる!先生が死ぬはずない!私をだまして何をしようって言うの!?!先生は、先生は・・・」

検事「嘘じゃない、彼はもう・・・いかん、落ち着け!落ち着くんのだ!」

まり「いやー!先生は・・・だって先生はインドに帰るんだって・・・みんなでインドに行こうって・・・恋人も連れていくんだって・・・そうだったのよ!・・・だから、だから死ぬはずなんてない!」

喜和子「まりちゃん!」

検事「・・・恋人?榎田秀司の恋人・・・いったい・・・(はっ!)」

検事の携帯が鳴る。

検事「なんだって!?!」

◆終幕

澤の病室。

男性病棟から見舞いに来た日下部。

日下部「もう歩いていいんですか?澤先輩」

澤「うん、もう平気。しかし君はびんびんしてるわね」

日下部「当たり前でしょう!天下の帝都新聞の敏腕記者ですよ!あれしきのこと、どうってことありませんよ」

澤「だけど、ごめんね。スクープも駄目になっちゃって」

日下部「しょうがないですよ、何だか知らないけど、上からものすごい圧力かかってきまし

たからね。今回は諦めます、でも、取材はまだまだ続けますよ。内緒でね」

刑事が見舞いに現れる。

刑事「お、お揃いですね。とにかく無事で何よりでしたね」

刑事「しかし、地元の警察が到着した時、日下部君、警官に抱き着いたそうじゃないですか、おいおい泣きながら」

日下部「泣いてなんかいませんよ、失礼しちゃうなあ！あ、でも僕も気が付いて目を覚ましたら隣に澤先輩が倒れてたんで、ビックリしましたよ」

刑事「ただどうして榎田の居場所が分かった時点で連絡くれなかったんですか？我々が同行していればこんなことには」

日下部「ん？僕は初めから澤先輩に」

澤「それより！・・・あのカズマという少年たちはどうしましたか？」

刑事「うん、保護されて警察病院にいますよ。今はだいぶ落ち着いてるそうです」

日下部「でも一応、榎田博士の身柄は確保できましたし、遺体になっちゃいましたけど、ひとまず一件落着ですかね？」

刑事「いやところがね・・・」

日下部「どうしたんですか？刑事さん、何か気になることでも？」

刑事「・・・榎田秀司の遺体の司法解剖の結果なんですけど・・・血液型が一致しなかったんですよ」

澤「！？」

刑事「そんなはずはないと思いますんで、今、再検査中です」

澤「・・・どういうことでしょうか？」

刑事「以前、榎田は敗血症を患って入院したことがあるんですよ。その時の血液検査のデータではAB型。しかし今回の遺体の血液型はA型と判定されました」

日下部「え？じゃあ、別人ってこと！？」

澤「そんなことあるわけじゃない！そんな馬鹿なこと・・・」

刑事「我々もそう思ってますよ。多分、入院時の検査に問題があったんでしよう。ひどい病院だな。聖ペトロ女子医大って・・・あれ？この病院か？」

そこに少女が花を持って入ってくる。

刑事「おや、お嬢ちゃん、どうしたんだい？」

少女「男の人がこの部屋に届けてって」

顔を見合わせる一同。

日下部「男の人？どこの誰だい？」

少女「知らない。でも足を引きずっていたわ」

◆エピソード

厚生労働大臣・新海昇の執務室。

ノックの音。

新海「はいりたまえ」
柏木「失礼いたします」
新海「待っていたよ。とにかく、座ったらどう」
柏木「は」

長い沈黙。都会の喧騒だけが小さく聞こえてくる。

新海「死んじまったな」
柏木「・・・はい」

新海「私は、生きたまま確保しろと命じた」
柏木「・・・それは」

新海「いいよ。もう仕方がない」
柏木「・・・すみません」

新海「しかし厄介なことになったな。クオリアを封じ込める唯一の糸口を失った」
柏木「・・・はい」

新海「どうする？なにか考えはあるかね？あ、それから今日、警察庁から検死の報告があった」

柏木「はい」
新海「榎田秀司の血液型が一致しないそうだ」

柏木「・・・は？」
新海「再度検査中だそうだが、とにかく、一筋縄ではいかない男だな。榎田ってやつは」

柏木「とにかく、もう一度、澤リカ子に会って話を聞いてきます。なぜ彼女が榎田の遺体のそばにいたのか。そして、なぜクオリアは作られたのか」

柏木の携帯電話が鳴る。

柏木「失礼します。もしもし、柏木です。どうしたの？高山君」
高山「課長、大変なことになりました！警察病院に保護されていた、榎田の患者が脱走しました！」

柏木「なんですって!?!」
高山N「ちよっと待ってくださいね。カズマ14才、ユリ17才の少年と少女です。二人とも殺人の疑いで指名手配中でしたね。・・・課長？どうしました？もしもし？課長!?!大丈夫ですか!?!」
柏木「・・・」

柏木N「榎田秀司の死は、謎の解明を遠ざけただけでなく、新たな惨劇の扉を開けたのではないだろうか？私には、そう思えてならなかった」